



## 学習活動における地域素材の活用と有効性

—地域を知り、学び、考え、人とかがわり、「郷土のよさ」に気付く—

跡見学園女子大学教授

堀内 一 男

### 1 問題の所在

東京には、「鹿児島県出身の教師」が大勢奉職しており、優れた学校経営や教育活動の実践者に出会うことが多い。時には、県人会と称し教育論をたたかわしている姿に接するが、南北600kmの広がりのある鹿児島県が一地点に凝縮され、「郷土・鹿児島」を共有する自信に満ちた教育観と相互扶助の心を抱く教師集団として感じることが多い。東京出身の私などからみると、うらやましく思う瞬間が度々である。

しかし、テレビで、インターネットで、携帯電話で、日本各地が瞬時に結ばれ、東京の情報が鹿児島でも同時に飛び交い、価値観そのものが多様化している現代に、『郷土への愛情や誇りをもち、よさを守り伝え、郷土の発展に貢献する子ども』を、教師の意図的な指導で育てることができるのであろうか。いや、育てなければならないが、アンケートによると「鹿児島の歴史や文化への関心」が低くなっている現在、学年発達を見据えた学習の内容と方法と場の吟味、「育てたい子ども像」に対する教師の共通認識、そして一人一人の教師の地道な努力が要求されてくる。

「郷土・鹿児島」の優れた特色のみを強調するのではなく、生活と密着した「地域」を学習の舞台にして級友や地域の人々とかがわりながら学習を積み上げていくことで「地域」を知り、発見し、その過程でものの見方・考え方を学び、いつしか帰属意識や愛着心に支えられた「心の共同体—郷土」を共通認識できる子ども集団を育成しなければならぬまい。

### 2 「学校の特色と学び方の多様化」を生み出す「地域素材」の導入

現在、作業的・体験的な活動、問題解決的な学習や自分の興味・関心等に応じた学習にじっくり取り組み、知ることの楽しさや学び方を身に付け、学習成就感を体得させる教育課程づくりが求められている。

そのためには、学習・教育活動を毎日の生活とかがわらせ、実感ある学習を進めるために、日常生活の中で、体験的に見て、知っている「地域の学習素材」を積極的に取り入れて、具体的な学習を展開していく必要がある。

地域は、子どもたちの生活圏としてとらえられるが、その範囲は学齢とともに広がる。取り上げることのできる学習素材も、地域の成り立ちと自然、人々の生活、地域の伝統と文化、生産活動、地域の先人の活躍と将来、近隣地域との結びつき等々、子どもの発達段階にふさわしいものを選択していく必要がある。

子どもたちの生活圏には、「共通の生活体験」や、暗黙のうちに「認知されている事

物」がある。したがって、教師は子どもたちの共通生活体験を用いて学習の導入を工夫したり、学習のスタートをそろえ、学級での話合いやディスカッションに全員が参加できる学習環境を設定することもできる。クラスの全員が参加できる学習活動は、子どもの主体的な学習姿勢を引き出すことができるし、学習が活性化し、弾みがつく。

また、地域の学習素材の導入は、学習課題に対して調査、観察、聞き取り等のフィールドワークとしての校外活動を計画しやすく、学習を見守る地域の人々の協力や支援を得て学習を地域に開くことができる。まして、学習に疑問が生じたとき、すぐ現地を訪ねて確かめることができるばかりか、学習の繰り返しや積み上げが地域の人々との交流やかかわりを生み出すことができる。このことは、子どもの成長にとって重要な意味をもつといえよう。小学校と中学校の連携を密にして、9年間に取り上げる地域の学習素材を吟味し、学習方法を工夫したとき、学校独自の授業プランが教育課程として完成し、学校の特色ある教育活動として定着するといってもよいのではないか。学習内容によっては、小学校と中学校で重複することもあるが、学年発達が学習方法を変え、学習課題の追及視点が多様化することで学習成果が高まるものと考えたい。

### 3 教科学習等で意図的に取り上げたい地域の学習素材

地域の学習素材は、学習指導要領の目標や内容とのかかわりで教師が取捨選択することになる。取り上げる視点は、

- ① 「地域」そのものが学習対象である場合（小学校の社会科における学校の近隣、学校の所在する市町村や県の学習、見慣れた事象に意味を発見する学習等）
- ② 学習の目標を達成するために、地域の素材を活用することが学習成果を高める場合（中学校の理科の「火山と地震」の学習に、身近な「桜島」を取り上げる等）
- ③ その地域に育つ子どものすべてが知り、体験を通して学ばせ、理解させておきたい場合（地域を愛し、地域を担う子どもを育成するための「必修鹿児島学習」の構想等）等が考えられる。

①の場合は、学習内容が確定しているので、取り上げる地域事象の具体的内容の選択と学習方法を工夫すればよいし、多くの市町村や県では副読本を作成し、学習の焦点化を図っている。しかし、②の場合は、教師の教材研究と教材開発、教材選択に委ねられてくる。全国版の教科書は、学習内容や方法が吟味され分かりやすく記述されているが、毎日の生活とかかわる具体性に欠ける一面をもつ。ここで教科書教材をより具体的に理解させるために、地域の学習素材を併せて活用することの意味が強調されてこよう。

③の場合は、特別な意図をもった学習活動のプログラム化である。新世紀カリキュラム審議会郷土学習振興委員会『郷土学習の振興について』（審議経過報告）には、「鹿児島における郷土学習の基礎・基本」が例示されている。

わが町の動植物／一年の年中行事／伝統工芸「薩摩焼」／新しい文化との接触「鉄砲伝来」／近代日本の先人「西郷隆盛」／世界自然遺産の島「屋久島」／ツルの町「出水」／宇宙に近い町「内之浦」／近代洋画をリードした郷土の画家「黒田清輝」等々、小学校から中学校への学年発達を配慮しながら、自然、文化、伝統、歴史、産業の幅広い視点から「鹿児島県で育ち学んだなら、必ず身に付けてほしい事項」（県民の必修学習素

材)が並べられている。

ここで例示された「郷土学習の基礎・基本」のうち何を取り上げ指導するかと、「教科学習」、「選択学習」、「道徳」、「特別活動」、「総合的な学習」等のどの場で指導するかは、各学校の選択となるが、「あれもこれも学ばせたい。知ってほしい。」と盛り沢山の必修事項を並べるのでなく、「自分の育った鹿児島はこんな所です。」と説明できるようにするために必要な事項を時間をかけて学ばせたい。取り上げた事項の事実認識を確実にし、そこで抱いた興味・関心を多面的・多角的に追究し、理解する学習を体験させたいものである。

鹿児島で学び育った子どもたちが各学校や地域で設定した「必修教材」による学習を行ったとき、学んだ学校が異なっても学習内容そのものを子ども同士の共通の話題とすることができ、その蓄積が共通の価値観や判断力を抱く「郷土・鹿児島」意識をもった子どもの育成につながっていくものと信ずる。

#### 4 学校を地域に開き、鹿児島の特徴を生かした教育活動の具体化のために

鹿児島の特徴を生かし、子どもにとって成就感があり、一生の財産となる学習を展開するためには、どのような配慮が必要なのだろうか。

##### (1) 教科学習の教育課程に地域素材を位置付ける

地域素材を教科学習に取り入れることは、学習が具体的になり、すべての子どもの学習参加が期待できる。そのためには、学習のどの単元で地域素材や地域の学習支援者を導入するかを位置付ける必要がある。授業者はそのための教材開発が必要となるが、全校体制で「地域素材の教材化」に取り組み、子どもたちの取組状況を記した授業記録とともに蓄積し、次年度の担当者が活用できる体制をつくる必要があるのではなかろうか。

##### (2) 指導する教師が地域を歩き、地域を理解する

現在、教師は、学校を取り巻く地域環境が一様でないことに気付きながらも、地域の自然環境や伝統文化、解決を要する諸課題、子どもや親の学校に対する願いや住民感情等に関心が薄くなってきていることが指摘されている。

確かに、自分自身の将来を見つめ、今何をしなければならないかを思考できる高校生にでもなれば、「地域性」より、自分が学んでいる「学校性」を重視して学習を積み上げればよいが、小・中学生は、毎日地域の中で地域を見て生活していることを忘れてはならない。そのためには、教師が学校付近や学区域、そして、指導したい「必修教材」にかかわる場所や歴史資料館、美術館、生産活動にかかわる場等を歩き、教師自身が教えるために体験的理解を深める必要がある。

「私の地域には、見るべき自然も、歴史も伝統も、取り上げる施設も無いので、学習に活用できる地域素材は何も無い。」の言を聞く。しかし、空間としての地域があり、生活している住民がいるならば、畑・寺・建物等の一つ一つが学習素材に成り得るという考え方をもちたいものである。時代の異なる二枚の地図があれば、変貌する地域事象を見出すことができるし、地域住人の中には、子どもに聞かせたり学ばせたりしたい経歴の持ち主や職業人がいっぱいいることを忘れてはなるまい。

## (3) 世界の中の、日本の中の「鹿児島」であることを意識する

毎日生活している地域や鹿児島県の各地に広がっている地域素材を学習することになるが、どこにどのようなものがあるのか（分布）、なぜそこに見られるのか（要因）、そこにしか見られないのか、他の地域ではどうなのか（比較）、どのように変わってきたのか（変容）、他のものとのどのような関連があるのか（関連、相互依存、競合）等々の多面的・多角的な地域を見る目、考える視点を意識したい。

このことは、鹿児島の特色を客観的に見つめることにつながり、優れている側面、他の地域に見られない特色、改めたり克服したりしていかなければならない課題等々を深く見つけ、独善的な地域理解に陥ることなく地域のよさに気付くことになるからである。

## (4) 育てたい子ども像を共通に抱く

かつて、鹿児島県は、中央への優れた人材を輩出してきた。このことは、現在でも県民性として引き継がれていよう。しかし、これだけ、日本や世界の時間距離が短縮され、共通の情報が飛び交っているとき、教師は子どもにどのような意識を抱かせ、どう育てるのがよいのだろうか。「地域に残り、地域の一員として地域の発展に寄与する子ども」、「地域で学び、地域を離れ、日本や世界各地に活躍の場を求める子ども」、「志を抱き、地域を離れ、他の地域で活躍し、再び地域に戻り地域の発展に尽くす子ども」…「郷土・鹿児島」指導にとって欠くことのできない視点ではないか。

## (5) 「地域」が「郷土」と呼ばれるための条件づくりを

誰にでも生まれ育った土地があるが、そこを「故郷（ふるさと）」「郷土」として懐かしい思い出を伴った地域として認識できる条件とは何であろうか。知識としての地域理解は勿論であるが、その地域を大好きな教師が意欲的な指導をしてくれたとき、友達とかかわり、学び、学習成就感が抱けたとき、そして、その住人が自分たちの生き方を熱く語り示してくれたとき…、そんな思いが心に宿っていたならば、いつしか心の共同体としての「郷土のよさ」を感じ取ることができるのではないだろうか。

## 【参考文献】

- ・ 新世紀カリキュラム審議会郷土学習振興委員会 『郷土学習振興について』 平成12年10月
- ・ 新世紀カリキュラム審議会 『鹿児島の特色を生かした教育課程の在り方について』 平成13年2月
- ・ 堀内一男 『地域性を生かした学校の個性をつくる教育課程』 「現代教育科学」 平成12年1月号 明治図書

## 堀 内 一 男 教 授 略 歴

昭和14年東京生まれ。東京学芸大学社会科卒業、駒沢大学大学院（地理学）修了。東京都内公立中学校社会科教師として3校を経験の後、世田谷区、教育庁指導部指導主事、中学校教育指導課長を経て中央区立銀座中学校長に。現在、跡見学園女子大学教授として「教職論」、「社会科教育法」、「総合学習演習」等を担当。主な編著書に「学校での環境教育」（国土社）、「国際理解教育の進め方」（教育出版）、「特色ある学校を創る」（明治図書）、「選択教科の新展開」（明治図書）等がある。